

最近のトピックス

第8回国際薬理学会議に出席して

歯科薬理学教室

東城庸介・斉田孝市・鈴木暁俊

この夏、東京で第8回国際薬理学会議が行われた。当研究室では全力を挙げてこの会議に参加し、それぞれポスターによる一般演題発表を行うとともに、薬理学研究の最近の世界的成果に触れる機会を得たのでその一端を紹介したい。

本会議は1961年のストックホルムでの第1回大会以来3年毎に開催されており、前回のパリに続き、今回は江橋節郎 東大医学部教授が会長となり、約60カ国から4,000名もの研究者が集まって7月19日から24日まで開かれた。参加者の約半数は外国人であった。

開会式は7月19日午後、NHKホールで催され、広いホールはほとんど空席がみられないほどの盛況であった。酒井文徳事務局長（東大医学部教授）の開会宣言に続いて、江橋会長、熊谷洋日本医学会会長（日本薬理学会名誉会員、元東大医教授）、International Union of PharmacologyのWaser会長ら多数のあいさつ、そして雅楽の演奏の後、伊藤隆太教授（東邦大医薬理）が計画した200名の子供たちによるバイオリン演奏などが行われ、好評のうちに式を終了した。

翌日からは京王プラザホテルを会場として2,000題以上の一般演題発表、26題のシンポジウム、17題の招待講演、8題のワークショップが行われた。今回の一般演題発表は若干の口演（130題）以外はすべてポスターによる発表（1,986題）であり、これは日本人の英語力を考えてとられた処置だそうだが、時間をかけて深く討論ができる点などメリットも大きかったように思う。

ポスター発表は40のセクションに分かれて行われた。演題数の多いセクションを例記すると、心臓143題、中枢神経136題、モルヒネ様物質90題、臨床薬理82題、血管80題、カテコールアミン80題、毒性78題、薬物代謝77題、プロスタグランジン73題、薬物リセプター64題、筋肉62題などであった。逆に、意外に少ない演題数のセクションは、呼吸24題、抗炎症25題、末梢神経27題、腎臓28題などであった。演題によっては複数のセクションに分類できるものもあるので一概には断定できないが、現在の薬理学の中心的研究テーマをおおよそ垣間見ること

ができよう。

モルヒネ様物質のセクションでは半数がエンドルフィン・エンケファリンに関するものであり、1975年に初めて発見されたこの一群の内因性オピオイドに対する関心の高さがうかがわれる。さらに興味を引くことはプロスタグランジンに関する演題が非常に多いことである。プロスタグランジンは、単に、子宮収縮物質あるいは炎症との関連物質としてばかりでなく、心血管からカルシウム代謝にいたるまで実に多彩な作用を有する物質であることが明らかにされており、今後、この分野の研究は益々盛んになることが予想される。

新しい分野としては免疫薬理31題、発生薬理24題、薬理遺伝4題、放射線薬理4題などがあり、今後の発展が期待される。

招待講演では英国のDr. Kosterlitzによる“Recent progress in our knowledge of the enkephalins and endorphins”が非常に好評であった。博士はエンケファリンを発見したオピオイド研究の世界的権威の一人であるだけに、会場は超満員であった。講演内容は内因性オピオイドの基礎的解説から、オピエートリセプターには少なくとも3種類が存在するという最近の知見までを含んでおり、特に、内因性オピオイドが痛覚ばかりでなく全身的な種々の生理機能と関連した物質ではないかという示唆は興味深いものであった。

また、ノースウェスタン大学のNarahashi教授は“Pharmacology of ionic channels in excitable membranes”という題で講演し、テトロドトキシン（フグ毒）を用いてのNaチャンネルの研究を中心に、イオンチャンネルの最近の研究状況についてわかりやすく説明した。

なお、当研究室から発表した3題の演題、“A new assay method for the potency of local anesthetics using frog rectus abdominis muscle”、“Mode of action of local anesthetics, prilocaine on the SR in skinned skeletal muscle fibers”、“A study of alkaline phosphatase of dental pulp”はそれぞれ好意的評価を受けた。

次回の大会（1984年）は英国のエジンバラで開催されることになっている。